

鉄橋

吉村
昭

鉄橋

吉村
昭

鉄橋

昭和四十六年十月十日 第一刷

著者 吉村昭

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座三の二の一 一〇四

大阪市北区野崎町七七 一五三〇

北九州市小倉区明和一の一一 一八〇二

印刷所 株式会社細川活版所
製本所 協和製本株式会社

定価 五八〇円

0093-700890-8716

小說集 鉄橋 目次

燒香客	靈柩車	少年の旅	鉄橋
133	103	73	7

遺体引取人

157

夜の饗宴

181

装丁 大村一彦

小說集

鉄

橋

鉄

橋

長い鉄橋のたもと、線路の近くで、焚火が赤々と焚かれていた。

保線夫や警官が数人、顔を赤く染めながら火に手をかざしていた。漆黒の夜空には、冷え冷えと銀河が流れている。

近くの林から拾ってきた木はすっかり枯れているので、火はよく燃えた。男たちは、時々思い出したように林の中を手探りで枯木を拾ってきたのは、火の中に投げ込んだ。その度に、華麗な火の粉が金粉のように散って、周囲の枯草が明るく照らし出された。

その枯草の上に、膨らんだ荒席が置かれていた。

すでに、検死は済んでいた。

トレイニングシャツに縫い込まれた刺繍で、その死体の身元も大凡は見当がついていた。二人の警官が線路の土手を下り坂道を自動車で行ったのは、もう三十分ほど前である。事故死をした男の家族をその警官が連れて戻ってくるのを、男達は火に当りながら悠長に待っていればそれ

でよかったのだ。

しかし、火を囲んでいる人々には、一抹の不安がないでもなかった。

死者の顔は勿論のこと、体もほとんど原形をとどめぬまでにこわされていた。ただ、両足だけは列車の車輪で不思議にもきちんと切られていたために片方は足首、片方は腿から、そのままの形で残されていた。

「全くひどいこわされ方だね。俺ももう三十年も保線の仕事をやってきたけど、こんなにひどいは今まで見たことがないよ」

小柄な痩せた最年長の男が、火に当りながら言った。

事故は、丁度日没時に起った。鉄橋の向い側の山の斜面に日が没しようとしていた僅かな間の出来事だった。

列車の機関士は、一際輝きを増した眩い西日を正面から受けて、人の姿を事前に認めることができなかったという。ただわずかに列車が鉄橋にかかる瞬間に、人の姿が西日を背に飛び上った姿だけを目にしたに過ぎなかった。

列車は、急ブレーキをかけた。が、その被害者の体は、陸続とつづいた多くの車輪で丹念に腿の付け根から頭部にかけてよじられ潰されていったのだ。

「しかし、ばらばらになった体を、よく手で持てるもんだな。俺たちには、とてもできない芸当だ

よ。怖くはないのかね」

まだ血の気の十分にもどらない顔をした若い保線夫が言った。

「馬鹿言うない。これだけは何度やっても薄気味悪いさ。今夜は飯も食えないよ。だけど、これだけきれいにこわされていると、肉でもつかむようなもので、思ったよりはいやじゃないよ。ひくひくしてまだ息があるのよりはましさ。しかし、なにがいやと言って、子供を背負った女の飛び込みほどこいなものはないね。少しでも生きていてみる、たまったものじゃないよ。虫の息でも、女は必ず子供はどうしたってきくんだからな」

小柄な保線夫は、顔をしかめた。

警官たちは、炎の色を見下しながら黙って保線夫たちの会話を聞いていた。

事故が起きて席の中に死体を収容するまでの間、轢死者の処置は、ほとんどこの小柄な保線夫の手によって敏捷になされていた。車輪の間に巻き込まれていた胴体を車輛の下にもぐり込んで剝がすように取り出し、鉄橋の上を曳きずってきたのも、この保線夫であった。

駆けつけてきた警官たちは、さすがに気臆れして、一人も手を貸す勇気のあるものはいなかったのだ。

「遅いね」

警官の一人が、同僚につぶやくように言った。

二人は、氣まずそうに黙りこくったまま、線路と反対の方角に眼を向けた。

線路は山腹に沿って敷設されているので、東の方角に緩いスロープが広くひらけ、鉄橋の下を流れている広い川幅の水が白く光って曲折しているあたりには、町の灯が夜光虫のように密集している。ネオンの色も混っていた。

汽車の警笛が、微かにかすれてきこえてきた。

みると、山肌に沿って弧状に伸びている線路の端を、煙を赤くほっほっと染めた機関車が体を傾けながら進んでくる。

「七時二十七分の下りだな」

保線夫の一人が言った。

列車が、近づいて来た。

人々は、後へ退った。機関車の車体が線路一杯にひろがり、機関室で石炭を投げ込む機関士のかがんだ姿が赤く染まって瞬く間に過ぎた。

焚火の火が車体の通過する風にあおられ、枯草の上に火の粉が散った。

客車の明るい窓の列が、しばらくの間火に当たっている男達の顔を断続的に明るくした。一瞬の間に目の前をかすめ過ぎて行く窓の中の乗客たちの姿は、ひどく満ち足りた和んだものにみえた。このレールの上で先行した列車が一人の男を轢いた直後だけに、その窓の中の平和な明るさは、奇妙

な印象にみえた。

列車は鉄橋を轟々と鳴らし、やがて尾灯も小さくなって林のかげに消えて行った。急に、あたりにより一層深い静寂がひろがった。

その時、微かに丘の下の方から、エンジンの音が呻りながらきこえて来た。曲りくねった坂道を、樹の間がくれに、ヘッドライトが道の両側の樹木を明るくしながら登ってくる。

「来たようだな」

若い警官が、枯草の小路を道路の方へ下りてゆく。

自動車は、下の道に停った。ドアが開き、室内灯が灯った。手に、白い布を巻いている若い男が二人いた。

警官に先導されて、黒い人影が、黙々と線路の方へ連なって登ってくる。

保線夫たちは、焚火に手をかざすのをやめた。

男たちは、線路の傍に立つと遠巻きに席をとり巻いた。やや遅れて、屈強な男に肩を支えられたセーターを着た女が上って来た。

「奥さん、気をしっかり持って下さい。御主人かどうかはつきり見定めて下さい」

警官の懷中電灯が、二方から席に集中された。

女の眼は、露出していた。席に近づくことが恐いらしく、体をのけぞらして一歩も前へ進まな

かった。

「しっかりしなくちゃ駄目だ」

肩を支えている男が、女の体を前に押した。女は、必死にその力に抵抗しながらもその眼は蓆に注がれていた。

男が女の肩をさらに押した時、女は、くると向きをかえると男の体にしがみついた。

「あの人です。あの靴は、うちの人のです」

女は、膝をついた。

人々は、懐中電灯の光芒の先端を見つめた。そこには、蓆の間から地面に垂直に立った白い運動靴が見えた。

男が、女の体を抱えるように土手を降りて行った。

「間違いありませんでしょうか」

警官が、遠巻きに巻いている男たちに言った。

男たちは、しばらく黙っていたが、手に白い布を巻いている若い男が一步前へ出て見透すように蓆の方をうかがった。

「そのシューズは、たしかに北尾さんの似ていますね」

警官は、近づくと蓆を除いた。